

一般社団法人東洋音楽学会機関誌

『東洋音楽研究』投稿の手引き

「機関誌最新号に掲載の「投稿規定」も合わせてご参照ください」

基本構成

投稿の基本構成は、原則的に以下の通りとする（「書評・視聴覚資料評」等の書式については、機関誌最新号を参照のこと）。

ついで

では、機関誌最新号を参照のこと）。

題目

執筆者名

本文

注

引用・参考文献

執筆者所属

外国語要旨

章立て

原則として、一番大きな単位に、「一」、「二」、「三」などの番号をふり、見出しをつける。

それより小さな単位には「一―一」のような番号をふり、見出しをつける。さらに細かい単

位は「(一)」「(二)」のようにする。

例

一 問題の所在と方法論

一―一 研究史の概略

(二) 第二次世界大戦まで

文字の表記

日本語の場合、文献の引用・固有名詞などの特殊な場合をのぞき、現代仮名遣い・常用漢字を用いる。また、固有名詞以外の外国語は、できる限り訳語を用い、特に必要な場合は、初出のみに原綴を付する。

数字の表記

数字は一〇、一〇〇などのように表記し、十、百は固有名詞をのぞいて原則として使わない（千以上の単位は、漢数字を使用して構わない）。

例 五〇枚組、四〇〇年間、二千年前年号については、日本、東洋年号を先行させ、（）内に西暦年号を補う。

例 昭和三六年（一九六一）、寛永年間（一六二四—一六四四）

ローマ字の表記

訓令式とヘボン式のいずれかの方式を統一的に使用し、変則的な表記法は用いない。長音の区別をし、その表記には長音記号を使用することが望ましい。

人名表記に関しては、原則としてその本人が用いている表記法を尊重する。本人以外の執筆者が独自に表記法を変える場合には、注などでその旨を記す。

ルビ等の表記

ルビ等の表記については、ワープロソフトの機能を使用して構わないが、複雑なものや特殊な修飾については、別途ハードコピーを添える。

引用の表記

二、三行以下の短い引用は、改行せずに文中に「」を用いて示す。それ以上の場合は引用文として別に掲げ、引用文の前後に一行分、上に二文字の余白を空ける。

注の書式

本文中で、注が存在していることを示す場合には、本文中の当該箇所には、（注1）のように、判りやすく書き込む。

例 ……洋文献に関する十分な議論はなされてこなかった（注1）。

注記は、脚注のかたちをとらずに、本文の最後にまとめて番号順に記載する（ワープロソフトの注自動設定機能等は使用しないこと）。

注 例

(1) 『利害』で引用された和漢文献、および神津の米国での修学状況を調査した仲万美子氏の仕事が、・・・

引用・参考文献の書式

本文中で文献を引用または参照する場合は、言及した後に、著者姓、発行年、参照ページ等の書誌情報を()でくくり、本文に挿入する。

- 例一・・・制度と呼べるものである(川島一九八〇、八二頁)。
例二・・・が要因であろう」(Malm 1980: 197)と示しているように・・・
例三・・・けっして珍しくない(Flaes 2000、山口一九九三)。

本文中で引用、言及した文献、楽譜、録音・映像資料等に関するデータは、本文の最後にまとめて掲載する。和文のみの場合は著者名の五〇音順、欧文と和文とが混在する場合は、著者名のアルファベット順に記載する。

引用・参考文献の記載例

洋書

単行本の書名はイタリック体(イタリック体で表示できない場合は下線で代用)で示す。論文の題目は引用符でくくる。事典項目もこれに準ずる。論文を掲載した雑誌名および書名はイタリック体(イタリック体で表示できない場合は下線で代用)で示す。

・単行本

著者姓、名、出版年、書名、出版地、出版社。

例 Malm, William P. 2000. *Traditional Japanese Music and Musical Instruments* (New Edition). Tokyo: Kodansha International.

・論文

著者姓、名、出版年、論文題目、副題、雑誌名、巻号、ページ。

例 Hood, Mantle. 1960. "The Challenge of Bi-Musicality." *Ethnomusicology*. 40(1). pp. 55-59.

・事典項目

執筆者姓、名、出版年、項目名、事典名、出版地、出版社、出版年、巻、ページ。

例 Katz, Israel J. 2001. "Flamenco." *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., London: Macmillan, vol. 8, pp. 920-925.

漢籍

『書名』、撰者／著者／輯者／註者などの氏名、叢書名、刊本／影印本などの表示。
(氏名の前に王朝名を頭書すること。また、巻、部、條など引用箇所の詳細は本文中で示す。)

例 『碧鷄漫志五卷付校勘記』、宋王灼撰、據知不足齋叢書本、中国古典戲曲論著集成
第一集所収。

和書

・単行本

著者、出版年、『書名―副題―』、出版地、出版社。(叢書名／論文集名／翻訳書の場合
は原本のデータなど)

例 内田順子 二〇〇〇『宮古島狩俣の神歌―その継承と創成―』、京都、思文閣出版。

・論文

執筆者名、出版年、「論文名―副題―」、「雑誌名／書名」(、出版地、出版社)、巻号、
頁。

例一 ホアキン・M・ベニテズ、地土井志保 二〇〇一 「仏教唱歌の創成と変遷―明治二二―四〇年出版の七冊の楽譜付き仏教唱歌を中心に―」、「エリザベト音楽大
学研究紀要』第二二巻、四九―六一頁。

例二 小長谷有紀一九九一 「モンゴルにおける接客技法としての歌―ホストとゲス
ト―」、石森秀三編『観光と音楽』、東京、東京書籍(民族音楽叢書六)、一七五
―二〇六頁。

・事典項目

例 岸辺成雄、池田弥三郎、郡司正勝監修『大系日本の伝統音楽』、筑摩書房、ビク
ター、PVTK1011(VHS/CD)、一九九〇年。

執筆者所属の記載

執筆者の所属の記載は、原則的に以下の通りとする。

例一 専任職の場合 (〇〇大学)

例二 非常勤の場合 (〇〇大学非常勤講師)

例三 (〇〇大学大学院〇〇研究科〇〇課程)

例四 (〇〇演奏家)

著作権許諾処理について

写真、画像、楽譜等の掲載・転載をする場合は、あらかじめ著作権者に掲載の許可を

書面で得る。転載をする場合は、出典を明記する。

インターネット上の公開について

機関誌に掲載された論文、研究ノート・報告、書評（紹介）・視聴覚資料評（紹介）は、インターネット上で公開される。写真、画像、楽譜等の掲載許可は、あらかじめネット公開を念頭に取得しておくこと。

（二〇一四年四月一日改訂）